
虫の契約者 + α = 乙女

夢乃時計

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

虫の契約者 + αⅡ乙女

【Nコード】

N3871C

【作者名】

夢乃時計

【あらすじ】

戦争の刻は近い^{とき}。だが、櫛奈田菊祢の胸に、何かが重くのしかかる。彼女は軍師。彼女は契約者。彼女は女。——そんな彼女を追いつ越して、大地にときの声がこだまする。

始まり+瑠璃の空Ⅱ序章：1

私は暗闇の中で目を覚ました。これで何度目になるであろう。もう二、三度目ぐらいであろうか……先程から同じ夢ばかり見て、どうにも寝つきが悪い。

きつと怖いのだ。戦に駆り出されることぐらい、バリエイ国王殿下に剣を捧げたときから覚悟していたくせに……。悔しいが、怖がっている。死なせることに、死ぬことにも……。私は——私はどうしても……。

浅い夢の中で、私——くしなだきくね櫛奈田菊祢は戦場に身を置いていた。大きな夫の背の上に立ちながら、味方が敵を殺し、敵が味方を殺し、それぞれの味方同士が殺し合う、混乱極まる戦況を見つめていた。

単に見つめていた訳ではない。機を見定めていたのだ。私は軍師だから。頭の中で何種類もの戦況を想定し、その時々にもっとも有効だと思われる計略をさらに何種類も想定していた。それにも関わらず、夢の中の私は機を見誤ってしまった。結果、見事に陣型は崩され、兵士たちの志気は地に落ち、死に恐怖した彼らが逃げ惑う。そして、見つめるのだ。生きていようと死んでいようと関係なく、私を恨めしそうに見つめるのだ。

——いつもそこで目が覚めた。

目覚めてから、何気なく一度まばたきをして、私はのそのそと上体を起こした。ぐっしりと汗で濡れてしまった寝巻きは気持ち悪いが、外気に触れると涼しくて気持ちがいい。

「……しかし、少しばかり寒くなってきたな」

涼しさは幾ばく。あっという間に、ひたつく汗が体温を奪っていつてしまう。

時期的にはもう冬に近い季節だ。昼間は、たとえ寝巻きで過ごしたとしても、問題のない気温ぐらいにはなるのだが、太陽の見えない夜ともなれば当然寒くなる。

さて……これからどうするか、だ。起きるべきか、寝るべきか――

眠気はある。が、眠りたくはない。あの夢を見るかもしれない……またあの夢を見るのは嫌だ。しかし、さすがにこのままは辛い。凍えてしまふ。起きるか。このまま横になってしまおうか……どうしよう……いや、起きよう。寝巻きを脱ぎたいと思ってたところであつたし。あとは――うん。まあ、ちょうどいい。それなら……とりあえず着替えを済ませてしまうか。

暖かくぬくみのある布団の中から、私は両足をさらした。さらした足に意外と傷跡が残つてなくて少し驚いた。跡ぐらい残つていても文句が言えないことを散々してきたから。驚きと共に意外と――いや、素直にうれしい。

ベッドからすつと立ち上がると、そのまま真つ直ぐ左右開閉式箆^ト箆へは向かわなかつた。

私は窓を指していた。いったい今は朝なのか、まだ真夜中なのか？それが気になった。

気になったことを、気になったまま放っておくのはむずがゆい。舞台上のすべてを遮り隠す劇場の大きな幕のように窓を隠した二枚のカーテン。そつとその両端を軽く摘んだ。

緊張と期待。心臓が早く、そして小さく脈打つ。

――朝焼けに染まるコリーネアの城下町を見たい。山の後ろから微かに見える光景だつてかわわないから……。朝だ。朝になつていてくれ。

照らされる街を思い描きながら、私はカーテンを開けた。

――だが、どこにも太陽の姿は見えない。空が瑠璃色に染まつている。朝は近い……しかしまだ少し遠い。

無意識のうちに私は窓枠に手をつけていた。窓ガラスに触れている指先が、冷たさが痺れに変わり始める感触を感じつつ、他人と比べて【ほんの少しだけ】低い鼻をガラスに近づけて目を凝らした。

……当然、何かが変わって見える、なんてことが起こるはずもな

く。太陽がやつぱり見えなくて、空の色が綺麗で……それだけ。

「間抜けだな……私」

寒さに震える奥歯の奥から、私はそう呟きを漏らした。息がガラスを曇らせて、景色を見づらくさせる。

「早く着替えよう」

開けたカーテンをそのままに、背の向きを逆さにすると、寒さに身体を震わせながら小走りで箆笥へ向かった。

箆笥の扉を開くと、中に納められていた衣服が目映る。故郷の繭羅^{まゆら}から持ってきた白や藍^{あい}の落ち着いた色の着物がほとんどだ。その中で、一着だけ赤く派手な色の衣服が掛けてある。これはこの国の軍服で、裾細^{スボン}二股腰布と共に着用する正装だ。

確か、ガルシアナ伯爵との対話は、今日であった。ならば、繭羅^{まゆら}の服を着ていくわけにもいくまい……。

気が付けば、私もこの異国での暮らしにだいぶ馴れてきた。風習や礼儀作法、この箆笥としてしかり使えるようになった。喋り方においても——上手く発音できないからまだ下手かもしれないが……。それでも、この国に着たときよりはましになった……と思う。

頭では分かっているけど、いざ口に出そうとするとうまく発音できない。どうしてなのかうまく解らないが。多分、出し方が分からないのだ。【ティ】など【テエ】としか発音できない。これでどれだけ馬鹿にされたことか……。ただでさえ、私だけでは役立たずだと思われているというのに。……悔しい。

寝巻きを脱ぎながら、私はそんなことを考えていた。

一つため息をつき、

「……くろおうぜつと」と試しに呟いてみた。

何か違う。惜しい所までいつていると思うが、まだ少し舌の動きが鈍い。……まだまだだ。これで、上手く指揮がとれるのであるうか。胸がぎゅっと締め付けられるみたいに痛くなる。

ああ、どうすればよいのだ。これでは駄目ではないか。——私ごとき者では所詮この程度ということか……？

違う。れは違う。断じて……それは……違う！！

深く、肺が痛くなるほどに深く、空気を吸い込んで吐き出した。吐き出した息が揺れていた。と、不意に身震いが私を襲う。私は我に返った。

「ーさむい」

そういえば、寝間着を脱いだままであった。

慌て裾細^{スボン}二股腰布をはき、皮帯^{ベルト}で締め、そして軍服に袖を通した。最初は冷えていた布地も、じきに体温で温かくなってくる。しかし、着るたびに思うのだが、この服はひどく窮屈だ。

普段から着ている着物は、裾細^{スボン}二股腰布などの腰布ははかないし、袖口だつて広くゆとりがある。首周りもここまで窮屈ではない。こんな、布留具^{ボタン}でびったりと身体に密着させた服など、息苦しいことこの上ない。

今、わざわざきつちり襟^{えり}を詰める必要はない。正装といっても、人目に触れようと思っっているわけでなければ、対話までの時間が無いわけでもない。

伯爵がこの国に到着するのは定刻通り一ノ陽刻^{いちのようけい}（約午後一時）だろう。この国の貴族はやたらと時間にうるさい。定刻に遅れることが悪いのは私でも分かる。だが、定刻ちょうどに着かなくてはいけないのは何故だ。細かすぎるであろう。

同じ人間であるはずにもかかわらず、文化の違いでこうも違う。襟を詰める必要がないのに詰めてしまう私も……いや、何を勘違いしているのだ、私は。そうだ、私は――
「人間ではないのであった」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3871c/>

虫の契約者 + α = 乙女

2010年10月28日05時48分発行